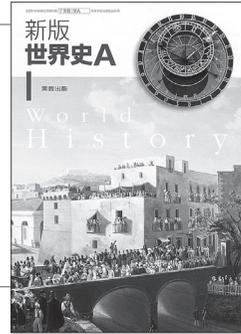


# 新刊教科書 執筆にあたって

## 新版世界史 A

茨城県立竹園高等学校  
中山 幸昭



「世界史 A」を教えるにあたって、いつも悩むことがある。近現代史中心とはいえ「世界の歴史」をわずか 2 単位の標準単位で教えることと、生徒に興味・関心をもたせるための工夫（史料を紹介して解説する、考えさせるために多くの問いを發する、具体的なエピソードを話す…）をすることとの両立である。私はこの問題に対して満足できる授業ができたことはないし、そもそもどのような状態をもって「両立」と言えるのか、「正解」は見当もつかない。しかし、本書ではこの難問にあえて向き合ってみた。以下にその特色を示す。

### ①世界史の全体像を俯瞰しやすい教科書

本文を 168 ページ、58 項目・10 テーマとし、1 項目・1 テーマとも見開き 2 ページとし、1 項目を 1 時間として「世界史 A」の授業が 2 単位の枠内で完結できるようにした。可能なかぎりシンプルな構成とし、叙述するうえで必要最低限の事項を精選して的確な表現をこころがけた。「近代世界システム」や「主権国家」などの用語については「補説」等で分かりやすく解説した。このため「世界史 A」のみの履修であっても世界史の全体像を把握しやすくなっている。また、前近代史においては各文化圏の歴史の叙述が断片的にならないように留意しており、「世界史 B」を併せて履修する場合に「世界史 A」からの発展的な移行が容易である。

### ②視覚イメージから世界史に迫る教科書

眺めるだけでも楽しい教科書をめざし、555 枚の写真（マンガも！）と 94 枚の地図を組み込み、副教材や図説なしでも各地域・各時代のイメージを視覚的にとらえられるようにした。

### ③さまざまな切り口から楽しく学べる教科書

各項目に設定された「考えてみよう」では図版

（写真・地図など）に即して考えさせることで知的好奇心を刺激し、歴史的思考力の形成をはかっている。例えば「始皇帝暗殺未遂事件を刻んだ漢代の画像石」（図版）には「もし、暗殺が成功していたら…」という問いが付されている。この問いを發展させて「秦は統一できたのか」、「統一できたとすればその原因は何か」、「中国に“皇帝”という支配者は出現しえたのか」などと問うことで学習者の想像力に強くはたらきかけることが可能であり、さらに、歴史における個人の役割とは何か、という抽象度の高い議論にふみこむこともできる。

また、アラビア文字を書いたり、『最後の審判』の画中にミケランジェロ自身を探したりする、作業的な「やってみよう」も学習者の興味・関心を増大させるための格好の教材となるであろう。

時代を代表する人物についてはその人となりがいイメージできるようなエピソードを添えて紹介することで歴史を身近に感じられるようにした（「Key Person」）。こうして、「昔の音楽に感動して 3 か月間、肉の味がわからなかった」孔子や「最初の信者はハディースで、生涯にわたり最愛の妻であった」というムハンマドラが紙面を飾っている。

この他、日本史との接点となる「日本と世界」、文化・生活をビジュアルに解説する「特集」、地理的知識と世界史とをつなぐ「歴史の舞台」など、世界史学習をよりいっそう面白くするための「装置」を多数用意している。

世界史は「必修科目」である以前に、それ自体で面白く、知れば知るほどより深く追究したくなる学問のほずである。本書が多くの高校生に活用され、生涯にわたる歴史への興味・関心の源泉の一つとなることを願う。